よく荷物を届けるマンションの一室に、とてつもない美人（男）が住んでいる。
外見年齢は二十代なのだが、いまいち年齢が判然としない。黒くて長い、美しい髪の持ち主で、その顔は中性的に整っている。
「いつもありがとうございます」とかけてくれる声は艶やかで、なんだかふわりと良い香りがして、相対するたびに俺はちんこが反応しそうになるのを必死で抑えていた。
彼はいつ荷物を届けても大体は家にいるので、在宅ワークなのだろう。それか……同居している誰かが養ってくれているか、どちらかだ。
だから俺は彼のことをひそかに「奥さん」と呼んでいる。
それだけではなく、ひっそりと自分のオカズにしてしまっている。
ただの配達員でしかない俺ではとても手の届きそうにない高根の花だ、せいぜい妄想の中で犯してシコらせて貰うしかない。
そう思って日々を過ごしていたのだが、ある日、ネットサーフィン中にとんでもないものを見つけてしまった。
「……誰でもあなたの虜になる、催眠アプリ……？」

気が付けば俺は、仕事でもないのに奥さんのいる部屋のインターホンを押していた。
このドアを開けた時に、このアプリの画面を見せれば……もしかしたら、もしかすると、俺の欲望は満たされるかもしれない……。
そんな都合のいいものがあるもんかと思いつつも、縋らざるを得ないほど俺はあの人を自分のモノにしたかったのだ。
待つこと数十秒。「はい」といういつもの端正な声とともにドアが開かれ――。
「……こんにちは、奥さん♡」
「え」
俺はその眼前に、スマートフォンをかざした。

結果として、催眠はそこそこ上手くいった。
もうなんだか耐え切れなくなってしまっていたので、玄関で強引に奥さんを組み敷くも、とろんとした目でろくに抵抗もしない。
「奥さん……♡　見てくださいよ、このちんぽ……奥さんのせいで、もうこんなにギンギンになってる……♡」
すっかり張りつめていた股間から血管の浮き出たモノを取り出し、その白い手に握らせる。
「……っ♡」
びくん、と小さく奥さんが身をすくませ、けれども熱っぽい視線がバキバキのちんぽに集中するもんだから、早くも尿道口からとろぉ……っ♡　と先走りが溢れ出す。
「ほら、手まんこして♡　奥さんのせいでこんなになってるんですから♡」

「は……はい……♡」
　どこかうつろな目で、奥さんが俺に従い手を前後に動かす。にちにち♡　といやらしい水音がいやに響き渡って、互いに興奮してしまうのが手に取るように分かった。
「あー♡　いいですよ、奥さんの手まんこ……♡　あんまり慣れてないのかな？　たどたどしくて可愛いですよ♡」
「う……うぅ……」
　気まずそうに奥さんが視線を逸らす。けれども、数秒後には俺のちんぽを熱っぽく見つめてくる……♡
「結構大きいでしょ♡　俺ってデカチンなのが取り柄みたいなもんだからなぁ……♡　でも、評判もイイですよ♡　おまんこの奥までしっかり届くし、絶倫体質で一晩中元気なままなので……♡　あ～奥さんのおまんこもズポズポしたいなぁ♡　雄子宮にチン先ちゅっちゅ♡　ってディープキスしまくって、そのままナカにびゅーびゅー種付けしたいっ……♡♡♡」
　欲望をそのまま奥さん耳元で囁くと、顔を耳まで真っ赤にして、小動物みたいにふるりと震えた。
「そ、んな……いやらしい、こと……♡」
「いやぁ、でも奥さんだって溜まってるんじゃないですか？　寂しいおまんこしてんじゃないんですか……？　俺だったらいますぐこの熱い極太ちんぽで満足させてあげられるのに……♡」
「いっ……い、です……そ、んな……っ♡」
　と、俺の胸を押すも、ほとんど力が入っていない。このまま犯して下さいと言わんばかりだ。
「あ～もう限界……っ♡」
　ささやかに抵抗されつつもここまで持ってきたのだ。ここからは自分のちんぽで言うこと聞かすしかないかな。
　奥さんの衣類を下着ごと取り払い、おまんこを強引に晒す。
「はぁ～っ……♡　綺麗なピンク色のおまんこっ♡　ウブウブな感じで参っちゃうなぁ♡　縦割れまんこになるまでたっぷりチンポハメしましょうね♡」
「ひゃめぇっ♡　あっ、あっ♡　それだけはっ♡」
　そんなことを言いつつも、奥さんのおまんこはひくひくと何かを欲しがっている。俺はそこに自身の亀頭をあてがい――
「ごめんなさい！　ちんぽのストレスが限界なんでハメちゃいますね♡」
　そのまま、奥さんのそこに自身の欲望をぬぷぷぷ……♡　と沈めてゆく。慣らしていないが、催眠アプリの効果で腸液が分泌されており、スムーズに挿入できた。
「あ～っ、イイ♡　キツキツなのにふわとろな最高のドスケベマンコが俺のちんぽにちゅっちゅ♡　ってご奉仕してくる……っ♡」
「ひぁ、あっあぁ♡　らめっ♡　は、はげひっ♡♡♡」
「トロットロのメス声イイっ♡　ちんぽとキンタマにきゅんきゅんクるっ……♡　かわいいっ♡　奥さんかわいいっ♡」
　そのかわいらしい唇を奪い、有無を言わさず舌を絡める。

「んぅ♡　ふぁ、あ♡　はむ、んっ、くちゅる……っ♡」
「はぁ……っ、恋人みたいなベロチューいいですね♡　奥さん、俺とキスするの好きでしょ？　キスしてるとおまんこぎゅっぎゅっ♡　ってしてきますもんね♡
「そ、んなことっ……♡　んっ、ひゃ、はぅ……っ！♡」
　否定しようとする口を黙らせるために、ごりごり♡　とカリ首で前立腺を刺激する。
「大好きな癖に……♡　ほらほら、言ってみましょーね♡　『旦那様が大好きです、このまま極太ちんぽで寝とってください♡』って♡」
「んんんぅっ！♡　やっ……」
「言わないと抜いちゃいますよ〜奥さん♡」
　刺激することをやめ、ゆっくりと腰を引く。すると、条件反射みたいにぎゅうっとナカが締まった。
「あれれ♡　抜いてほしくないんですか？　だったら、ね、言うことわかるでしょ？　これからは俺が貴方の旦那様ですよ？♡」
「っう、だ、旦那様が大好きです……♡　こ、このまま……極太ちんぽで寝取ってください……っ♡」
「よ〜しパパがんばっちゃうぞ〜！」
　ぐぷぷっ！　と一気に内側を抉り、最奥を目指す。結腸の入り口にくぽっ♡　と亀頭がハマると、奥さんが「ひぐっ♡」と背筋をそらして甘イキした。
「ほーら♡　子宮口が亀頭にちゅぱちゅぱ絡みついて甘えてきてる♡　ザーメン欲しいんですねえ……♡　種付けおねだりしてきてかわいいですよぉ……♡　このまま種付けプレスしてびゅー♡　びゅー♡　ってたーっぷり濃厚ザーメン出しますから♡　しっかり受精アクメして孕んでくださいねっ♡　孕めっオラッ！　俺の精子で孕めっ……！♡　ママになれッ♡♡♡」
「ひぅ、うっ♡　ひゃ、ぁ、ッあ゛、ああぁああッ♡♡♡」
　宣言通り、体重をかけて奥の奥まで犯しつくして孕ませ目的の射精をする。
　どぴゅるっ♡！　どぴゅどぴゅびゅるびゅるるるるるるる〜〜〜〜っ♡♡♡
「あぁあっ〜〜♡♡♡　あつくて、こいの、いっぱいっ……♡♡♡　ぁ、お゛っお゛ぉ〜〜……っ！♡」